

# 開拓古老者懇談会

浦幌町郷土博物館・編

この記録は、1964年10月12日浦幌町公民館を会場に浦幌町・浦幌町議会・浦幌町教育委員会・浦幌町文化財審査委員会が主催して開催された「浦幌町開拓古老者懇談会」の記録である。この速記録の一部は、1964年11月1日発行「広報うらほろ」第119号に掲載されているが、現在わかる範囲で全文をここに発表するものである。なお、この懇談会の出席者は次のとおりである。

北村 クニ (川 上)	荒木 九平 (栄 穂)	大浦 シン (合 流)	上田喜三郎 (相 川)
朝日とりを (活 平)	桑原佐之八 (円 山)	桑原 藤枝 (円 山)	杉江 新吉 (帯 富)
杉江 フシ (帯 富)	小沢 弘 (稲 穂)	安藤 重吉 (養 老)	深井市十郎 (統 太)
村岡 喜平 (養 老)	渡辺 長吉 (十勝太)	河内 治作 (本 町)	飛田辰次郎 (本 町)
館 久治郎 (栄 町)	吉川 利昌 (本 町)	中川 政雄 (吉 野)	高松与次郎 (住吉町)
飯山 高市 (万 年)	森 信貞 (貴老路)	大津 満孝 (厚 内)	(敬称略・順不同)

**山口菊雄教育長** 大変お待たせいたしました。浦幌町に住んでいる者として、過去の開拓の功労者の皆様方にこういう会を開きまして、昔を偲ぶとともに、新しい町作りはどうあらねばならないかということを考えるために、最も良い機会であろうと考えております。そこで、多数の古老の方々にお集りいただいた次第でございます。しばらくの間、私、司会をさせていただきたいと思っております。大変ご迷惑な方もあったと思っておりますけれども、お話をお聞かせ下さいまして、この会の有終の美を飾っていただくことをお願いしたいと思います。

**渋谷健一教育委員長** 教育委員会を代表して皆様方に一言お礼申し上げたいと存じます。きのうから霜が降りまして、大変寒い朝となりました。只今、司会者の方からご案内しましたようなことでお集りをいただきました。古い時代の色々なことを聞かせていただきたいと、ご案内申し上げましたところ、お忙しい中をご出席いただきまして本

当にありがとうございました。開拓当時のことと申しましても、沢山のことがございまして、衣食住のことから畑仕事、あるいは川の漁のこと、又道路、橋など、細かく申しますと色々なことがございます。又、年代にしましても明治33年頃のことから大正時代のことまでございましょうけれどそういう面倒なことはぬきにしまして、生々しい開拓当時の話を家に居られるときと同じ気持ちで、お聞かせ願いたいと存じます。それを当方で録音し、又8mmフィルムに収めまして、これからの町民の皆様にお伝えしていきたいと考えております。今から15年前に「開村50年」という式典を行いましたから既に15年経っています。その当時色々お骨折り下さいました方々も大勢ここにみえているわけですが、そういう人達も混えてお話をお聞かせ願いたいと思っております。なお、きのうから東京オリンピックが開かれています。ここにいながら東京で起きますことを見たり聞いたりすることのできる時代となりました。しかし、浦幌も開村65年

## 目 次

開拓古老者懇談会	浦幌町郷土博物館・編	2
十勝太古川遺跡の紡錘車	宮 宏 明	7
浦幌町で発見したチャシ2例	後 藤 秀 彦	15

**写真説明** 加賀団体開拓記念碑と旧住吉神社：浦幌町稲穂地区には、明治42年舟田徳次郎を団長とする「加賀団体」17戸が集団入植、開拓に当った。記念碑は大正11年、旧住吉神社境内に建立された。

ともなりますと、初めから見ると夢のような変わり方をしていると存じます。それは、昔苦勞をした人の積み重ねのお蔭でございまして、それをこの機会にお聞かせ願いたいと思います。

なお、この会を開催するにあたり町・町議会・町文化財審査委員会・社会教育委員の皆さんに本当に多数のご意見、ご協力をいただきました。初回でございまして、時間の関係や設備の関係で手の届かない点が多数あると存じますが、お許し願いたいと思います。

**佐藤幸守町長** きょうこの会合においで下さいました皆様にごあいさつを申し上げます。私、町長の佐藤でございます。皆さんが本当にお元気で、そして遠くからしかも朝早くからお出かけをいただきまして、このように一堂に会されました事、本当にありがたいと存じますし、又皆さんのこのお逢者なご様子を拝見いたしまして、私は非常に嬉しく思っているわけでありまして、浦幌町が開村以来65年の年月を経ましたとともに1万5千の人口を擁しまして、農家をはじめ林業、漁業あるいは炭砒というように色々な状態の町になっております。振り返りますと65年も前に浦幌町に初めて足を踏み入れて森林を切り開き、あるいはひときわ汗にまみれて開拓をしていただいた先人古の方々のその真剣なご努力がここに今日の浦幌を形造ったわけでありまして、私は歴代の要請を担った理事者の方、それを助けて調整にご苦勞を積まれた村会、村会議員あるいは家事に精を出して今日の浦幌に大変発展した商業、第一線に立ちまして、そして又家庭におきまして夫を助け、子供を育てあげられ、そして今日の浦幌を築き上げられました影の功勞者である婦人の方に大敬意を表しているわけでありまして。「温故知新」、古きを尋ね新しきを知るということばがございまして、本当の皆さんのその長い間の経験をここに一堂に会されましてお互いに語り合い、そして古きを尋ねながら今日の浦幌、さらに明日の浦幌を築く上にどんなにか生きて社会教育であろうかと思っております。

皆さんのご苦勞、そして皆さんの真剣な体験を通して浦幌町民が報恩感謝の心呼び起すと同時に、そのご苦勞に感謝をしながら、さらに一層精を出して立派な町にしたい、そのためには非常に有意義な会合であろうと感謝をしている次第であります。どうぞ皆さんも逢者で今日を迎えられ

した陰にはご苦勞もあったと思います。又、本年のような凶作に見舞われて困難をきたした年もあったと思います。あるいは豊作で、あるいは豊漁であって家を挙げて、あるいは部落を挙げて喜びの宴をした当時もあった事と思います。どうぞ色々な面で色々な事をお聞かせいただきまして、今日のこの会合が永く町史に飾られますようお願い申し上げます、誠に簡単でございましてごあいさつにかえる次第であります。

**畠山勲町議会議長** きょうは皆さん大変遠くから既に70歳以上の高齢の方ばかりがここに集って今回教育委員会の主催による皆様の今日までのご苦勞の積み重ねをひとつ生の声として聞き、これの子孫に伝えたいと非常に涙ぐましい、又そして微笑ましいご計画でありました。皆さんがよくご了解していただいてご出席をいただいたことを私、今日出席をしたひとりとしてお礼を申し上げる次第であります。今日の浦幌の発展の姿からみますと65年の昔を想像する事はちょっと困難であると思いますが、その時代から今日まで色々星霜旗幟交々、色々な問題に遭遇して今日なおかくしゃくとして、ご健在でおられる皆さんでございまして。今日は言い残すことなく、又事の大小にかかわらず表に出たこと、あるいは陰にかくれて我々が知ろうとして知られなかったことを、この機会を得たのでございまして、遠慮なくご発表、ご体験をお聞かせ願ひ、そしてまたそれを貴重な参考として今後時代の人方と手を握りあって、あるいは指導もしていかなければならぬだろうし、色々な事を計画していくことにおきまして、大きな参考になるだろうと私は考えております。本当にお年寄りの皆さんご苦勞でございまして、今日はひとつこういう機会はあまりないのであります。十分に今日のこの会合を有意義に後々までに伝えさせるひとつの物語として積み上げをお願いいたします。

**中川政雄(吉野)** 皆さんご承知のとおり、私も浦幌で生まれて今日まで育ったといえますか年を取って大きくなったと申しますか、そういうようなことで浦幌生れの人間としては、私あたりは最高の年寄りではないかと思うのであります。7つの頃から多少のことは気憶しております。私は、明治32年に生まれておりますので、やはり明治37～38年頃から当時のことは多少気憶がございまして、それ以前は全くわからないので、それ以前に

浦幌にお入りになった方々、ここでは朝日のお婆ちゃん（朝日とりを）、館さん（館久治郎）あたりが一番古いのではないかと、こういうふうには私は気憶しておるんです。まずもって、館久治郎さんにひとつ伺いますが、館さんはおいくつで浦幌へ入られたか、明治何年にお入りになったか、それをお聞かせ願いたいと思います。

**館久治郎（栄町）** 私が生まれましたのは石川県で、北海道に来たときには15歳でした。越中を出て大津へ向かったのですが、室蘭で石炭を積み寄りしました。大津は随分時化の所です。大津に上がるときに時化に遭いまして、皆なわざわざここへ来て、いま帰されたら皆な命がなくなると心配しまして、精進が良かったのか無事上陸することができました。泊ったのは、私は忘れもしませんが大津の黒沢さんという馬小屋へ泊りました。そして、座敷に上がらさせてもらいましたけれど、雨が漏ってあちこちにポツリポツリ。女の方がみえましたので、「こんなに雨が漏るのをどうにかしてくれないか」と言ったら、「もう10分間待つて下さい。なおりますから」と言ったので不思議でならなかったのですが、雪があるうちは融けるから逆水になって座敷に落ちるのです。10分間経ったらピタリと止まってしまうので皆感心していた。そして、話を聞いたら「凍ばれがひどいからこういうふうになるのです。晩になったら凍ばれるから雨が止まったのです」そう聞かされびつ

くりしました。それから皆なにお膳が出てご飯を食べかかってからご飯のおかずはお汁におこうこうでした。そのお汁は豆腐のおつゆですが、豆腐のおつゆの中に1寸ほどの黒い魚が入っていた。私ら、石川県ですから山へ行くと川せきがおるんです。そしたら、これは恐い所だ豆腐のおつゆのダシに川せきを入れてある。それに寄ったところが皆な食べているおつゆの茶碗を下に置きました。そして、「このダシは何か」と聞いたら「北海道のししゃもといつて、川へ入つて来ると真っ黒になって。ししゃものダシです」。それは皆な「それは蛇ではないのか。そうかそれは魚なら何でもなし」と言つて、驚いて話しました。それから黒沢旅館で泊つてあくる日、暖い所から来た人だから、足袋1足はいている者もいなくつた。それで雪が2尺も降つているので足袋をいただいて、ワラジをはいて出かけたのですが、川を川と思つていませんでした。大津からちよつと出て、今、斎藤漁場という所がありますが、あそこをズーッと渡つて、砂山をズーッと歩いて十勝太という所へ出て、十勝川へ入つて、浦幌へ川ばかりつたつて来たわけです。そしたら、北海道という所はこんな大きな道路がついて立派なものじゃ。きれいな雪が降つているし、道路を歩いているような気持で皆なと歩いて来たのですがそれが聞いてしまつてから、それは川を歩いていたんだというので、ビックリしました。なにしろ凍れの多い所で



PL. 1 主催者席（左より山口菊雄教育長・佐藤幸守町長・畠山勲町議会議長・渋谷健一教育委員長・斎藤有文  
化財審査委員会委員長・石丸雅朗社会教育委員長）



P.L. 2 出席者（左より、吉川利昌・飯山高市・大津満孝・飛田辰次郎）

した。そして、浦幌川に入って土田の農場の事務所は伊織長太さんの自宅に事務所が在ったのですが、そこまで行きまして、その日に土地を見に行くことができなくて、十勝太の岐阜農場の原田さんに皆な泊めてもらって、見に来たら皆な土地もいいのでここなら百姓をしてもいいと思ひ覚悟した。半分は乾いてて、半分は谷地で、それを開墾するのに小屋を造り、木を切って開墾した。イナキビが良くできたので、3反も4反も作った。明治31年、イナキビの穂が出た頃大洪水が起き、十勝支庁から救助隊があり、その手続きに3～4日かかりました。

**吉川利昌（本町）** 水という話が出ましたが、安藤さんが入植された当時、水で相当苦労されたと同ったことがあるのですが、その当時の水の話聞かせて下さい。

**安藤重吉（養老）** 私は大正6年の水害にあいまして丸裸になりました。それから、7～8年と作が良くなりました。それで、9年に内地へ行って北海道は作が良いと言って、丸裸になってしまい、これでは上浦幌に行くか、どこかを探してみようと思っていたところ、下野松太郎さんがそんな所へ行く必要ない、ここで辛棒しなさいと土地を貸してもらった。私は空いた所でいいと言って、下野松太郎さんに助けてもらったんです。そして、道路の両側のヨン原を30町歩やるからと言って、現在地のところを開きました。

**河内治作（本町）** 生剛村と言っていた、今の愛

牛渡舟場で渡してもらうのに裸足で「アンコ、冷めたいか」といって、「こうすれば暖くなる」と言ってトントン踏んでみせたがひとつも暖くならない。私は熊谷農場の山田藤右衛門さんという人のところでお世話になりました。熊谷農場も岐阜農場も割り当てが終っていて、岐阜農場に聞いたら空いているところがあって、そこで良かったら入れと言われ、その当時は何もなくて、私は単独で来ましたのでとても難儀しました。来た年とあくる年は殆どフキを食べて、31年の年大洪水で東西の山が水につかって何の収穫もなかった。母がどのくらい苦労して私たちを育ててくれたかと思うと、感謝の気持で一抔です。そのあと、岐阜農場へお世話になりました。道路も橋もなく、常室へ来て木を昼も夜も切って、焼いて非常に明るかったです。1升の石油が1年くらいありました。ご飯食べて、あとは家の中で焚火です。その当時寒くて、今日は暖いなあという日で-20℃、寒くて-30℃です。そして山稼ぎをしました。その当時は出面する人がいないんです。明治36年9月、本別～浦幌間が開通になって鉄道ができるときに土方をして、外に食堂ができて、そして3年くらいはしししゃもとごしょいもが穫れ、夏はキノコとフキが主食みたいでした。今はこんなに開けて、皆さんのおかげと思って感謝しています。

**中川政雄（吉野）** 発祥の地というのは岐阜農場、熊谷農場、土田農業の3農場が浦幌の発祥の地だと聞かされているのですが。



PL. 3 出席者（左より、飛田辰次郎・河内治作・館久治郎・安藤重吉・深井市十郎・渡辺長吉）

**朝日とりを（活平）** 私は16歳の年に熊谷農場に来まして、5年間。そして、円山に移り3、4年いて活平に移りました。食べ物はいなキビとジャガイモが主食で、味噌は自分で作りました。

**大浦シン（合流）** 熊谷農場に入り、明治35年12月に上浦幌に入りました。

**北村クニ（川上）** 明治40年に浦幌へ来ました。

**上田喜三郎（相川）** 明治31年に入りました。

**村岡喜平（養老）** 今の朝日あたりに大きな樹林がありました。8町歩も10町歩もありそれを開きました。あそこを想うと何ともお話になりません。朝日は約40戸あり、川を大きな木を切った帆柱を建てて走りました。8年ぐらいで良い道ができました。

**中川政雄（吉野）** そのころは円山から十勝川まで駄鞍で運んだんです。20間ばかりの倉庫があってそこへ運んだんです。

**渡辺長吉（十勝太）** 明治34年に入りました。1、2年生のときは大津で、3年第一浦幌尋常小学校、4年のとき十勝太、その後大津へ行きました。大津に製鉄工場があり、鉄道敷設計画がありました。しかし、漁場があるので大反対をしました。そして、稲穂に坂東という大地主がいて、その人が鉄道を浦幌に廻してもいいと言って浦幌に廻したんです。学校を出てからすぐ酪農に入りました。

**桑原佐之八（円山）** 明治33年岐阜から来て大津に入りました。丹羽さんで一晩泊って、常室へ上って来たんです。そして、立花次郎吉さんのところへ一晩も二晩も泊って、石井源次郎さんという人が10万坪土地をもっていたので、そこに1年ほどいて、二十間道路ができたとき、支庁から土地をもらった。そして、明治35年に鉄道ができ、36年から汽車が走りました。そこに、5～6年いて

第三橋のところを180円で買って2年農夫をしました。

**小沢弘（稲穂）** 父が明治32年に入り、私はでした。そのころ稲穂には家は1軒もなく、父の姉と共同で内地の阿波から来て、私らは土地をもらって、17.8歳で高台とか谷地で作ったんですが、収益もさっぱり上らない。食糧にしても、麦3升に米を茶碗に1杯しか入れないものですから、ほとんど麦とかとうきびのおかゆでした。高台を開墾するとき馬3頭かけて、涙の出るくらい開墾して費用はみんなもと入りして3反、ちょっと悪くて2反でした。春、雨が降ったら開墾している当時水がたまってエンバクが浮いてしまった。そして、下頃辺川が荒れて曲り曲って、稲穂は水が出るようになった。米は内地米ではうまくできないので、千代田（池田）の種と混ぜて使ったらようやく稔ったので、それからだんだん多くなった。米作を始めたのは私が25歳のときで、大分早かった。稲穂の地名がついたのは約40年前だった。1年団の名をつけるのに、何とつけたらいいのかと言って、水田があったので「稲穂」とつけた。2百町あまりの水田があり、1反に6俵ぐらいとった。大正2年は凶作で、天皇陛下から焼判を押した枡をもらった。

**杉江新吉（帯富）** 明治30年に兄が来ており、35年に入地した。

**深井市十郎（統太）** 大正4年岐阜農場に入り、6年に厚内へ行った。厚内には監獄室があり、そこではとても辛い思いをしていた。

**杉江フシ（帯富）** 常室から上常室へ7年通った。

**吉川利昌（本町）** 私は末っ子で、現在57歳であり古いことはわからないんですが、私の父は河西支庁の官吏をしていて、大津・足寄・豊頃・浦

幌を廻ったのですが、浦幌がいいと言って郵便局の代理をしたりしていましたが、支庁の課長さんと会津の関係で、支庁長がその同期生なので、それで森林監守はイヤだと言って、フトンも家も全部作ってくれというようなことでやったらいいんです。私も覚えているのですが、馬が牧場から十数頭も入ってくる気憶があるんですが、それは5～6歳のときだから、明治末年か大正の始めだと思います。一番気憶に残っているのは大火です。大正5年8月15日で、その日劇場に入っていて、皆なの間をくぐって表へ出て、家ではみんな何もしないで私が来るのを待っていて、私が帰ってから、色々な物を出したんです。ですから駅通関係もみんな焼けてしまって、辞令などは仏壇に入っていてそっくり出したから残ったんです。私は馬が10頭くらい出入りしたのをかすかに覚えています。中学1、2年のとき父が亡くなって、大津蔵之助さんはやかましい人だと開いていたのですが、私の父と非常に懇意にしていたのです。1週間して学校から帰って魚釣りに行って帰って来たら、大津さんがちょっとこいと言って、行ったら、おすわりさせられて香典帖を前にして説教された。内容は、十勝には父ほどの人はいないのに、お前は何をしているのかと、いうことでした。これが今も忘れられない想い出です。私はこうして、開拓当時の人達が集まって、その人とその声を残しておくということは、立派な行事だと思っています。

**荒木九平（栄穂）** 私は明治33年の秋北海道へ来

ました。そのとき、内地から出たわけです。その当時、髪を刈るバリカンというものがなかったのですが、郷里を出るときに、何もない所だからと思って床屋さんで見立てて持って来たんです。そして、「君、これはいいものを持って来た」と、言ってお盆だとかお祭りに若い衆が5、6人集まりまして交代でやりあいました。その頃からバリカンが流行ってきたんです。そうして、バリカンもこんなにへってしまいました。

**中川政雄（吉野）** その当時、本当の荒山というか原野へ入られ、その木を倒して鋤を入れて、畑にして、初年度どのくらい開墾されたのか、それを聞きたいのですが。

**飛田辰次郎（本町）** 入地したのは明治31年4月です。ほかに明治29年に止若（幕別）に来て2年ほどですけど、土地が悪くて、浦幌が土地がいいと聞いて浦幌で土地をもらったんです。その土地をもらう時分には、支庁は帯広にあったんです。そして、役人が大津旅館に行って、出張所を置いて戸籍謄本をつくって年間を通じてお願いする。すると、すぐに土地をくれるんです。そして、明治31年4月の雪解けにさみしく、見たことも、来たこともない浦幌へ来て、その日のうちに万年の石丸さんの隣へ、越中から来た人4、5人と一緒に浦幌の土地を見に来ました。

**中川政雄（吉野）** 限られた時間で話し足りないことがたくさんあったと思いますが、このような機会をまた設けて、良い内容を残したいと思います。今日は本当にありがとうございました。

## 十勝太古川遺跡の紡錘車

宮 宏 明

本稿では、十勝太古川遺跡の紡錘車を紹介し、併せて、その出土位置等から若干の問題について考えてみたい。

本稿をまとめるにあたって格別なる御高配を賜った後藤秀彦氏並びに実測図等で御助力いただいた森 秀之君に対して心から感謝申しあげる次第である。

十勝太古川遺跡は、Fig. 1のように南側の第1地点に1号竪穴～7号竪穴が、北側の第2地点には、8号竪穴～13号竪穴が所在する。12号竪穴は、ブルドーザーによる整地の際、2/3程が削られ、失われてしまった。

本遺跡からは、紡錘車10点が出土している。そのうち、本稿では、形状の比較的良好なもの8点を紹介するものである。